

うえんせりだより

創刊のご挨拶

こんにちは。西村交益社の西村正司です。その節は、お世話になりありがとうございました。

この度、ご縁のあった皆様に、ニューズレター（通信文）を送らせて頂くことと考えました。葬儀に関する事に関らず年間数度、不定期ではありますが、お伝えしたいと思います。

もし「葬儀屋からの便りなど縁起でもない」と思われる方は、申し訳ありませんが、FAX〇七九・六六一・五六七六まで「一報ください。二度とお手元に届かないようにいたします。そうでない方は、しばらくのあいだお付き合いください。」

編集発行

〒667-0021

養父市八鹿町八鹿1057

西村交益社

Tel.079-662-5909

Eメール sougi@fureai-net.tv



何故、私がニューズレターを出したくなったのか。そのお話をします。

その前に少し私の事を紹介させて下さい。私は一九六一年生まれ、今年四十三になります。家族は両親、妻、三男の七人家族です。趣味は中国語、積読（つんどく）、独酌ぐらいです。

弊社は、私が生まれた年の九月に両親が始めました。文字通り、会社と共に成長しました。一人っ子の私は、後を継ぐ事を当たり前だと思っていました。

ただ、この仕事でがんばろうと思えるようになったのは、この二、三年です。それまでは、「他に自分に合う仕事がないか、この仕事を自分は何故するのか」を、納得させるのに費やしてしまいました。

最近では少なくなりましたが、以前、葬祭業は特別な職業と見られていました。必要ではあるが、日の当たらない仕事。そんなふうにも世間も従事している者も感じておりました。しかし、最近はいくつも様子が変わりました。「死」が新聞・テレビを始めとする多くの場所で語られ始めました。

いよいよここからが本題です。私が何故ニューズレターを出したくなったのか。それは次のような理由からです。

一つには、葬儀の色々な事を勘違いされている方が多いことです。もう一つは、書店に並んでいる葬儀の本に書かれている事は、当地方では合わない事例が多いことです。このような状況では、葬儀に対する不安が増し、困惑される方が多いのではないかと思います。しかし、私の知識のなさをさらけ出す事になりますし、皆さんにそっぽを向かれるかもしれないとの恐怖もあります。けれども、これまでの経験が何かしらお役に立てるのではないかと考えました。



ニューズレターのタイトル「有縁千里」
とは、中国のことわざ

有縁千里相合、 無縁対面不相逢

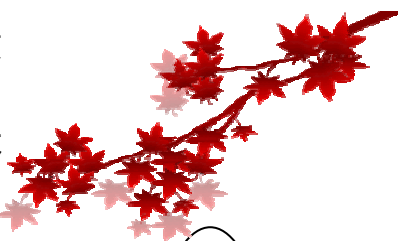
縁があれば遠いところからでも来て会うが、縁が無ければ向かい合っていないさえ巡りあえない

から取りました。

亡くなった方が、私とあなたの縁を作ってくれました。その縁を大切にしたいとの気持ちから、名付けました。

誰かの死の上に成り立つ縁ですが、単に葬儀サービスを提供するのではなく、これを一つの縁として、大切な人を亡くされた方のその後にも少しでもお役に立てたら、そして、それを終わりではなく始まりにできたらと考えます。

どうか、よろしくお願いします。



友引は友を引く？

友引とは、中国唐代の暦算学者、李淳風（りじゆんふう）が説いた六壬時課（ろくじんじか）という考え方がその起源です。そもそも「速喜、留連、将吉、空亡、大安、赤口」という時刻の吉凶占いでした。それが日本では順番も呼び方も変化し、「先勝、友引、先負、仏滅、大安、赤口」という、今の六曜に定着し広まったのは、江戸時代の末期といわれています。

この六曜は吉凶占いに用いられ、「先勝」は午前が吉、「友引」は「勝負なし。共に退く」とされ、正午だけが凶で午前午後は吉、「先負」は午後が吉、「赤口」は午前が吉、「大安」は一日吉、「仏滅」は一日凶となっています。

各月（旧暦）は、正月・七月は先勝、二月・八月は友引、三月・九月は先負、四月・十月は仏滅、五月・十一月は大安、六月・十二月は赤口から始まり、あとは順に月末まで六曜をあてはめていくだけです。

友引は縁起のいい日なのですが、「友をひく」という字面から、友の死を誘ってしまうと解釈して、その日を避けるようになっていたといえます。また「仏滅」というのも、もとは「物滅」で、仏教とはなんの関係もありません。

現在、但馬のほとんどの火葬場は、正月以外休日はありません。京阪神都市部の火葬場が、友引を何らかの形で休日としている現状を考えると、但馬のほうが合理的と言えるかもしれません。但馬では友引に葬儀を出さない習慣はありません。ただ地域によっては、普段より若干遅めに棺入ります。最近では、友引という事よりもご寺院の都合（先約である法事のため）により、週末に棺が遅くなる場合があります。

友引を気にするかどうかは、あくまでも個人の自由です。ただ、葬儀は故人の為に行うのであれば、もっと他に気にしなければならぬ事はあると思います。

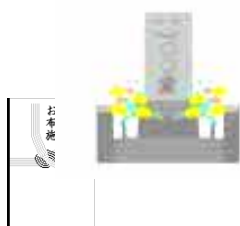


葬式費用はどこまで 課税対象の相続財産から 控除されるの？

葬式で葬儀社、お寺に支払った費用は控除されません。戒名料、御布施などは合理的範囲の金額は控除されます。そのほか、手伝いの人への心づけ、交通費など、通常考えられる葬式の費用は控除されません。

ただし、初七日、四十九日などの法要費用、満中陰返し費用は控除されません。これはあくまでも、葬儀ではなく法要だからです。

また、墓碑、墓地の購入費用も控除されません。ただし、故人が生存中に入手したものは、非課税財産として控除されます。



軒先の白布

お葬式のあったお家の軒先に、白い布がぶら下がっている事があります。今ではお葬式であった印のようになっていますが、本来はそうではありませんでした。

今ではほとんど見られなくなりましたが、以前は、葬儀中の作法の一つ、剃髪（得度する時に行う儀式）の後に、縁側に吊られた手拭いで、手を拭かれる御導師がいらつしゃいました。

また、亡くなられた方の浴衣（寝巻）を、北に向けて軒先に四十九日の間、吊るす風習がありました。ご年配の方には憶えておられる方もいらつしゃると思えますが、これは、四十九日間のさまよっている魂が、夜になると、そこに来て寝る（休む）からだと言われているからです。

「これらの手拭いや浴衣が、形を変え、白布に変わったのでは」と、おつしゃるご住職もいらつしゃいます。ご存知のない方は「あれは、亡き方のお顔に掛かっている白布を縁側に吊るすのだ」と、申されます。お間違いなさるなように。

白布は、さらしを一尺四方ぐらいの大きさに裂き、どれか一つの角に白糸で輪をつくり、縁側或いは玄関に吊るします。通常は、満中陰が済みましたら外します。納骨の折に、お墓で燃やされると良いでしょう。

葬儀に携わる者に 必要な資質とは？

葬祭業者にしても、僧侶にしてもお葬式に携わる者にとって、最も必要とされる資質は何でしょうか？それぞれが専門知識や技能を持つことは大前提ですし、葬儀社の広告によくある「真心をこめて」「奉仕の心で」「誠心誠意」とかの、修飾語のついた仕事をを行うことは、わざわざ言つまでもなく、プロとして当然の事です。

では、その上で必要なことは何でしょうか。いくつかありますが、その中の一つが「死」に慣れないことなのだと思います。こつこつと不思議に思われる方もおられるでしょうね。

「死」はそれぞれが固有のもので、一つとして同じものではありません。我々が携わる一つ一つの現場で、それぞれの家族が固有の死を抱えて、悲嘆の中にあつて弔おうとしているという事を、強く認識する必要があります。そして、故人がどういう人であつたか、家族の想いはどうなのか、そういうことを謙虚に知ることが、固有の死に係わる第一歩にならなければいけないと思います。

ただ現実では、葬儀は特定の日に集中する傾向があります。これは友引とかの関係ではなく、統計上からも明らかです。私の手元に平成十四年度・朝来郡広域斎場の資料がありますが、これによれば、火葬執行数は三八一件、火葬があつた日は二二七日、そのうち五件以上あつた日は二日。養父市斎場の資料はありませんが、人口から見て、同程度と考えられます。

葬儀は毎日平均して一件あるのではなく、月のうち二十日間に集中し、一日に二件平均なのです。(養父市・朝来郡の場合)だから、重なる時には、連日出棺を繰り返す事になります。同じ住職と三日続けてお会いすることも頻繁ではありませんが、年に何度かは経験します。

そうすると、滞りなく式を終わらせる事が最重要になってしまい、「固有の死」がどれも同じになってしまいます。「死」に慣れる」のです。これは避けなければならぬ事だと思えます。



「運命の顔」

藤井輝明著 草思社

私の気になる本を紹介します。第一回は、TBS「ニュース24」でも紹介された、ユニークフェイス(容貌障害)藤井輝明氏の著書です。顔にアザ(正式には海綿状血管腫)があり、ハンディを負ったにもかかわらず、挫けることなく、人生を切り拓いていった手記です。

彼は、人生を紆余曲折しながら、人に出会い、努力し、大学教授になりました。そうすると、今度は「教授になれたのは血管腫のおかげだ」と心無い人に言われたりします。

ここでハンディがメリットに替えられていきます。

ハンディとは何だろうと考えます。事柄には良いも悪いもなく、それに意味を持たせるのは、私たちの気持ちなのでしょう。

彼が障害と葛藤して生きている姿にも、感動をしますが、まわりの評価が変化する事にも考えさせられる本です。

彼が障害と葛藤して生きている姿にも、感動をしますが、まわりの評価が変化する事にも考えさせられる本です。

静夜思

この本を抽選で一名の方にプレゼントします。ご希望の方は、住所・氏名・電話番号・ニュースレターの感想を書いてハガキかメールで応募下さい。締め切りは十一月末。当選者の発表は発送をもって替えさせていただきます。

これほどの台風・地震被害が出るとは、誰が予想したでしょうか...

自然はごく当り前な振る舞いをしただけなのでしょうが、我々にとっては、安全と幸せを流されたような感じでした。物質的な損害はもちろんの事、縁ある人の安否が確認できない不安は、耐えがたいものです。災害に遭われた方や、大切な方の安否に不安の夜を過ごされた方も、少なからずいらっしやるでしょう。謹んでお見舞い申し上げます。私に出来るのは、皆様のご無事をお祈りすることぐらいです。

ニュースレターを考えてから、ほぼ一年になります。でも、皆様に拒否されるのが怖くて、中々発行が出来ませんでした。ようやく勇氣を振り絞って思い腰を上げたしいです。大それたことは思っていないですが、できれば皆様の何かのお役に立つことができたいです。(不知其名)